学会設立10周年にあたって

「環日本海学会」創設の初心

渋　谷　　武（第１期会長）

学会が出来てから十年経ったという。私は私なりにこの学会の中で勉強させて頂いた。それは、ボーリング式学問ではなく、井戸造り的学問の違いについてである。私は大学卒業の時、我妻栄法学部長から、「滾々と絶えることなく、湧き出でる井戸を掘り給え」といわれた。その為には足場を広くとり、そこをしっかりと踏み固める必要を強調された。

中国の成語には「飲水不忘掘井人」がある。日中友好関係の回復の時、周恩来の使った言葉としてよく引用されているのだが、美味しい水の少ない中国にあって、名水を供給する井戸を顕彰する「碑」が立てられているところがあった。

「井戸を掘る」と簡単に言うけれども、簡単な作業ではないことを現代人は忘れているのではないであろうか。どこに水脈があるかは、人工衛星からおくられてくる地質図が的確に示してくれる。とすれば、そこへボーリングの機械を配置して掘削をすれば、それで豊かな水は供給されると思っているらしい。イラクへ派遣された自衛隊の活動は給水施設の整備といわれているが、その後の経過の報道はない。砂漠地帯の中でどういう苦難に遭遇しているかは、今の日本の政治家達はどれだけ推理することが出来るのだろうか。現代科学技術を駆使すれば水脈を探り当てることくらいは簡単かも知れない。しかし、人間のみならず地球上に存在するあらゆる生命活動に貢献する給水施設の検討に取り組むことになるとどうであろうか。「共生」では、都合が悪くなれば自分だけが生き残る道を残そうとする。他者の生命への配慮は棄てて顧みない。私の言う「協生」は、すべてのものの生命活動を尊重する奉仕の協働連帯活動がそこには展開されるのであって、そのそれぞれの生命活動・存在を否定されるものはどこにもない。

イラクで求められる給水・貯水施設は、すべての生命体の存在を可能にするものとして構想されなければならない。そのような生命活動すべてに対する奉仕の協働連帯活動の体系は、古くからの足場を広くとり、造営された井戸造り技術の中にその解決法が求められなければならないであろう。

古典的な井戸が、“よいとまけ”音頭の中で営まれた協働作業と井戸端会議を生み出した文化的基盤の持つ生活の融合連帯の実体《環（輪→話→和→）→》の示す教訓の検討を必要としていることは否定できない。

地球には、自浄力、自然の復元力自然治癒力がある。それがより有効に活動し得る条件を検討し、それが可能となる情況を導き出す作業こそ、自然に対する人間の奉仕活動の基本である。

人間は、この地球という宇宙空間のなかでその生命活動を許されたことを忘れてはならない。人間は、決して地球の主人公ではない。他者・自者の間で傲慢な自己主張、収奪・破壊に終始するのではなく、豊饒な自然環境の中であらゆる生命活動を可能とする奉仕に徹する作業を進めなければならないのである。

「中心・周辺」理論の中で、繁栄する「中心」のために、収奪・荒廃に追い込まれる「周辺」という格差を地上に作り出すのではなく、存在するものすべてが、それぞれにその存在意義を発揮できる状況を創りだす作業こそ、私の主張する「協生」である。世上よく言われる「共生(ともい)き共生」論は、自己主張・自己優先・自己肯定・我執の空間拡大の論理の中にある。それとは異なるものであることをここにお断りする。『老子』の中では、無名は天地の始めなりとし、万物生成の根本は名のないもの、その無名が天地の始めであり、万物の始めであると捉えている。自他合一の世界、自己主張のない自己執着のない状態が始めであった。そこにこそ、天地人一体の状態があり、それこそ「協生」の世界である。そこへ還ることを、地球宇宙空間の道理に還ることと捉え、「協生」の基本と考えたのである。従って、そこには、混沌と考えられるかも知れないが、差別のない、天地人融合・和合の宇宙の始まりがありえたと言えよう。対立・抗争のない生命の歓喜が素直に充満し、諸物の連帯・協調・融合・和合の世界が展開している桃源郷でもある。

渋谷　　武（しぶや　たけし）
1994.11.～1996.9　会長（当時、新潟大学教授）
現在、新潟市在住